

無風

大海に浮かぶ帆船の乗組員の気持ちになってみたらどうだろう。

1ミリも動かず、見渡す限りの水面は鏡のようになって、

空との区別が付かなくなっている。

時の流れも感じないまま途方にくれているが、

ほんの僅かな変化にも敏感だ。

登場人物 女1

女2

女3

女4

女5

女6

女7

女1 そう。

「そっか。」

女1 何かしてるみたいだった？

「ううん。何もしてないみたいだったから。」

女1 そうか、何もしてないと不審者に思われるのか。

「行こう。授業始まる。」

女1 女が一人やってくる。この位置に立つと、おもむろに一礼。すると、自然と拍手が起きる。そんな訳はない…。もし仮に拍手が起こったら今の、そんな訳はない、という台詞は

カットして、小声で「ありがとうございます」と言った方が良い、人として。見上げると空、は無いので、太陽も、無い。見渡す限り雲一つ無いので、良い天気かどうかからない。目の前には背の高い金網のフェンスが無い。だからそれを越えて下をのぞくと、植え込みも無い。この辺りには高い建物が無いから、街が一望できるような気はする。風は吹いていない。地面はコンクリートではないので、ざらついている訳でもないし、熱くも冷たくもない。蟻も居ない。そろそろお昼の時間も終わる頃だとしたら、あの辺りに、もう一人の女がやって来ない。やって来ない女は、屋上で一人佇む私に向かって、

「何してるの？」

女1 何も。

「何もしてないの？」

女1 うん。私は結局やって来なかった女と言葉を交わす事なく、教室なんてどこにあるんだ、と思った。

女1、上手奥に去る。

女2、下手前からやってきて立ち止まり、キョロキョロする。

女2 屋上から降りる階段は薄暗くて、他の階段の半分くらいの幅しかないはずだ。私の学校は屋上なんか無かったから想像でしかないし、高校で屋上に上れるところなど本当は滅多にないと聞いたことがあるから、学校の屋上でお弁当を食べる学生像はたいい架空のものだ。そうこうしている間に何段降りたかわからないけれどここで折れ曲がって、こっちを見ると廊下が無い。向こうの方から、クラスメイトの男子達の声が、しない。もう授業が始まっているのか、それとも体育の授業なのかもしれないけれど、誰も居ないみたいだ。私はない教室を探して歩きます。

女2、お辞儀をして上手奥へ去る。

もしも拍手が起こったら「ありがとうございます」と小声で。以下同様に。

上手奥へ。

女3、下手前から。

女3 ゴーっと続く長い廊下は無いので、ふと、窓の方に目をやると、窓は無い。こっちは校舎の裏側で、体育館があつたりするんだろうけど無いなあ、と呟かないでいると、プールも無いし、実習室も無いけど、裏門を乗り越えていく男子生徒の姿も無い。あそこに居ない男子は、きつとマサル君かな。マサル君は、幼稚園の時から小中高と同じ学校に通っていない男子だ。お昼休みが終わると決まって裏門から逃げるように帰っていく。不良仲間と会うとか、パチンコに行く訳でもなく、夜遅くまで働くお母さんの為に、弟たちの面倒を見ている訳でもない。もうなんだかわからない。でも私はきつと、マサル君の事が好きだったのだ。高校生なのに大人びているかも分からないし、背が高いのか、目鼻立ちも、シュツとしているのかすら分からない男なんて、私の理想とするところだ。早くマサル君に会いたい。マサル君という名前かどうかともわからないけど。

「ほら、ぼーっとしてないで」

女3 あ、うん。

女3、走って上手奥へ行く間際、振り返りお辞儀。

女4、下手前から走って来て、

女4 私は居ないあの子を探しているうちに、演劇部の部室の前に辿りつかない。だとしたらここは、なんだろう。ガラガラ、と音がしない引き戸を開けずに耳を澄まさないで、向こうの方から発声練習の音がしない。なんだ、ここに演劇部は無いのか。私は高校の時、演劇部に入っていないだったので、演劇部の人達がどこで練習していたのか知らないけど、仲の良い友達が一人、演劇部に入ってなかったの、その子とはよく、演劇部の人ってなんか不思議な人達だよ、と話したりしてはなかった。それなのに、今こうして演劇をやっている、不思議なのは私の方だ。

「こっちこっち」

女4、上手奥を見て、走り出す。お辞儀。

女5、下手前から走って来て、

女5 ねえ、どこまで行くのー？

しばしの間。

女5 私は、歩く。歩いていく。そして、たまに走る。

女5、上手奥へ走る。

女6、下手前からやってきて、立ち止まる。

ほんのワンフレーズ、「蛍の光」を鼻歌で、

女6 周りの子はみんな泣いていたようにだけど、私の眼球はいつものようにドライアイのままだったことにしよう。いつも以上にコンタクトが張り付くから、少しくらい泣いたっていいくらいなのに、泣こうとすればするほど冷静になって乾いていく。みんな、これからどこ行くの？その先に何かがあるの？私は何も感じないまま、悲しいふりをしていてもいい。無いことを在ることにするのは得意だけれど、在ることを無いことにするのはやったことがない。そもそも、何が在ったことがないらしい。

お辞儀をして、上手奥へ歩いて行く。

女7、下手前から。

女7 私が演劇に興味を持ち始めたのは大学に入ってからだ。二つ上の兄が居なかったの、弟も妹も居なかった。つまり私は一人っ子だった。だからどこにも居ない兄は私に対して、お前には兄が居ないからお前が長女だからね、しっかりしないとイケないよ、と言われた

訳でもないので随分奔放な大学時代を過ごしていた。ほとんど家には帰らず、彼氏の家に入り浸りでもなく、寮に住んでいた友達の実由美の部屋に転がり込んでいた訳ではない。ずっと部屋に閉じこもり、ユーチューブばかり観ていなかったのだ。じゃあ一体私は何をしていたんだろう…。あの頃の私の心の中は、完全に無風だった。

女7、お辞儀をする。

女7 そんな時だ、あの子がまた私の前に現れなかったのは。

「久しぶり。」

女7 あ。

女7、上手奥へ。

女1、下手前から、

「何してるの？」

女1 え、見ての通り何も。まだ何もしてないよ。私はそう答えてない。

「そっか。」

女1 いい加減何かしてると思った？（靴をトントンしながら）

「うん。何もしてないみたいだったから。」

女1 そうか、何もしてない人は、これから何かをする人か。

「演劇やらない？」

女1 演劇？…そこに居ない彼女は何も言わずに、ただ私を見て、微笑んではいなかった。

女1、上手奥へ去る。

女2 でも演劇ってさ、一度足を踏み入れたが最後、三十歳くらいまでは抜け出せないって聞いた事あるけど大丈夫？その頃になって結婚したいとかいろいろ騒いでももう手遅れだった。

女2、靴を脱いで上手奥へ。

女3、下手前から裸足でやってきて、靴を見る。

女3 一步前に出した足は、けっして戻すな、とは誰の言葉だったろう。小学校の時に通っていた剣道教室の先生だった気がする。違うかもしれない。数学の先生だったかな。そもそも誰の言葉でもないかもしれない。誰の言葉でもないのに私の口から出たって事は、それはもう私の言葉だ。

女3、靴を揃えて、そのまま上手奥へ。

女4、下手前からやってきて、靴を見て驚き、一度戻る。

女3、戻って来て、驚き、戻る。

女4、戻って来て。

女4 あの時、扉も開けてないし、誰にも何も言われてない。私はついに、足を踏み出す決心をしていない。…この足は、いつ踏み出したんだろう。

女4、靴をちよつとカッコよく置いて、去る。

女5、下手前からやってきて、靴を見る。

女5 私の靴。…良く見ると、ここには舞台で良くある電信柱が無い。その隣にはベンチが無い。この辺りには大きなポリバケツが無くて、背景には、このくらいの高さで灰色に塗られた塀が無い。その向こうには、二階建ての家が無い。私の靴だけが、ある。

女1、下手奥の出入り口が気になって、入る。
上手前から女7、上手奥から女3が出てくる。

女5、靴を片一方だけ持って、去る。

女6、下手前から出て来て、じっと靴を見ている。

「何してるの？」

女6 靴、見てるの。

女3・7 あ、あー！
女3 ああ…、
女7 あ、ああ…、
女3 あ、どうも…。
女7 ああ、どうも…。

「そっか。」

二人、お辞儀をする。

女6 (振り返り)あなた、私が高校生の時に、私の前に現れなかった人だよな？また現れないの？

頭を上げて、お互いに拍手をしてあげる。

女6、靴を履いて、下手前に歩き去る。

女5、上手奥から歩いて来て、立ち止まる。

女7 いや、良かったです。あの、これ、ずっと「二人の奴」だと思ったんで、
女3 一人の奴？
女7 一人芝居を繋げていく奴かと。
女3 ああ、そういうのがあるんですね。
女7 分からないですけど。
女3 ああ。

女5 …。

女7 「会う奴」でしたね。

女5、下手前に走り去る。

女4、上手奥から走って来て、立ち止まり、周りをゆっくりと見回す。

やがて、下手前に走り去る。

女3、上手奥から下手前に走り抜ける。

女2、上手奥から下手前に走り抜ける。

女1、上手奥から走り出て来て、軽く肩で息をしている。

女1 なるほど、そうですか…、そういう、アレですか…。

女3 あ、そうなんですネ。
女7 こつちから来ましたよね？

女3 ああ、うん。
女7 誰か、居ませんでした？
女3 いえ。
女7 そうですか。
女3 しかしこれ、凄いですよね、あの、同じようなアレが、あの、アレしてて、
女7 ああ、はいはい。
女3 あ、行きました？結構。
女7 いや、結構で言うか、まあ、
女3 凄いですよね。
女7 ですね。
女3 下北沢ってこんな感じなんですかね。
女7 ああ、さすがの下北沢もここまでは、ええ。
女3 私、たくさんの舞台に立ちたいと思ってたんです。
女7 ああ、じゃあ良かったですね。
女3 でもこういう事じゃないんですよね。
女7 ああ…。
女3 ずっと舞台が続いてるって、こういう事じゃない。
女7 ですよ…。
女3 あれ？
女7 え？
女3 あ、あれ？こっち、向きが…、
女7 え？
女3 あ、いや…、え、そっちって…？
女7 あ、同じような、感じになってるんですけど…、
女3 ああ、やっぱりそうですよね。
女7 ええ…。
女3 じゃあやっぱりここだけ違うのかな、
女7 え？

女3 私さっき、こっちで、やっぱりこんな感じになってて、こう出たんですよ、
女7 はい。
女3 そしたらこっちから出て来たんです。
女7 はあ。
女3 向きが、変わってるんですよね。
女7 向き？
女3 今までは一定方向で並んだのに、ここだけは向きがなんかこうなってる、
女7 はあ。
女3 これ絶対わざとな奴ですよね。
女7 え？
女3 混乱させようと思ってる。あ、ちょっと、まだここに居ます？
女7 え？
女3 あんまりやたらめったら動き回ると、ここがどこか分からなくなってしまうので。と
女7 いうかも、ちょっとわからないんですけど。
女7 あ、はい…。
女3、上手奥へ去る。
と、下手前から女4が出てくる。
女4 わ！ああ、どうも…、
女7 どうも…。
二人、お辞儀をして、拍手。
女4 (見まわし) あ、ああ…、なるほど、ああ…、
女4、下手奥の出入り口を覗き込むように見て、そこには行かず下手前に去る。
女3、戻って来て、

女3 あれでした、あの、向こうも、こうなっていました…。

女7 何が…？

女3 向き。

女7 ああ…。

女3 で、なんか、誰か、居ました…、

女7 え？

女3 なんか、誰か…、

女7 あ、どんな子でした？

女3 あ、なんか、あれ、どんな子だったかな、ちよつと突然だったんで、

女3、上手奥へ、

女4、下手前から、

女4 ああ、

女7 あ、どうも…、

女4 ああ、いえ、なるほど、こういう…、

女7 え？

女4 あ、いえいえ…、じゃあ、

女7 じゃあ…。

女4、下手前へ、

女3、上手奥から、

女3 あの、なんか、背が(女7を見ながら)こんな感じで、髪も、そんな感じで、だいたい、
こんな感じでした。

女7 はあ…。

女3 お知り合いですか？

女7 あの…、だいたいこんな感じだったら、もう私じゃないです？

女3 あ、まあ、似てましたけど…。え、ちよつともう一回…、

女7 あ、いいです。

女3 え？

女7 あの、あなたがそっち行くと、こっちから誰か出てくるんで…。

女3 え？

女7 なんか、知らない、人…。

女3 あ、それどんな子ですか？

女7 えつと、なんか、すらつとした、うんと、

女3 あ、すらつとしました？

女7 しましたね、ええ、

女3 え、向こうに居るんですか？

女7 ああ、まだ居るかどうかはわからないんですけど…、

女3、下手前に、

女2、上手奥から、

女7 わ！

女2 ああ…！

女7 ああ…、ああ…。

女2 あ、どうも…、

女7 どうも…、

二人、拍手。

女2 あ、ごめんなさい、人違いでした…、

女7 ああ…、

女2 あ、なんか、向こうで、あの、こっちに居るって聞いたもんですから、

女7 ああ…、
女2 なんか、すみません…。
女7 いえ…。

女2、上手奥へ。
女3、戻って来て、

女3 違いました。

女7 そうですか…。

女3 なんか、全然、すらっとしてなかったです。

女7 はあ…。

女3 なんか、すらっとしてるって言うか、すらっと感は全然なくて、どっちかって言うと、うん、もつとこう、ああ、なんか、(女7を見ながら)、こんな感じの？これはすらっと感じゃなくてなんていうんですか、もさつと感で言うんですか？もさつと感じゃないな、もたつと？うん、なんか、あんまり良い言葉が出ないんでアレなんですけど、ええ。

女7 あの、ちよつと向こう、もう一回行ってもらっていいですか？

女3 え？

女7 ちよつと、向こうに、

女3 はあ…。

女3、下手前に。
女2、上手奥から、

女2 あ、すみせんたびたび…。なんか、向こうの人が、あっち行けって、言うもんですか
ら…、

女7 いやあっち行けとは言っていないと思うんですけど…、

女2 すいません、お邪魔します…。

女7 いえ…。

女2 でも良かったです、なんか、賑やかになってきて。
女7 あの、あんまり、悪口言わない方がいいと思いますけど…、
女2 え？

女7 いや、あつちで…、
女2 え？

女7 え、だって、なんか、人の事をなんか…言ってますんか？

女2 え、なんにも言っていないですよ？

女7 もさつとだとかもたつとだとかなんとか…

女2 え、誰の事ですか？

女7 ああ…、あ、そうですね…、いや、なんか、ちよつとシステムが…、

女2 え？

女7 あ、いや、あの、あちらの方に、その、優しくしてあげたら、いいんですけど、

女2 でも、初めて会った人なんですよ。

女7 ええ…、

女2 なので優しいも何も、普通なんですけど、

女7 ああ、そうですね、変に優しくなるのもね、アレですもんね。

女2 いや、じゃあ、ちよつと、ええ…。

女7 あ、すみせんなんか、

女2 あ、いえ…。じゃあ…。

女2、上手奥へ、
女3、戻って来て、

女3 なんか、向こうの人？ちよつとおかしいかもしれないですよ？いきなり私説教されて、なんか、突然システムがどうか言い出して、怖い人かもしれないですよ、だって初対面なのにいきなりあんな言い方されて、凄く変な感じですよ。あつちは行かない方がいいですよ、あの人が居るうちは。

女7 これ…、あれだな、どんどん私が、サンドバッグ状態になる奴だな。

女3 え？

女7 あ、いえ…。

女3 いや、私、ホントあつちじゃなくて良かったです、こつちで。あ、肩揉みましようか？

女7 あ、それ変に優しくなってますから…、

女3 あ、それ言われました。なんなんですかね…。

女7 ちょっと変わってもらっていいです？

女3 え？

女7、下手前から去る。

女6、上手奥から出てくる。

女3 わあ！

女6 あ、あ、すいません…。

女3 あ、いえ…、

女6 あ、どうも…。

女3 あ、どうも…。

二人、お辞儀をして、拍手。

女6 あ、ああ…、すいません。

女3 はあ…。

女6、戻る。

女7、戻ってくる。

女7 なんか、全然違いました。

女3 え？

女7 知らない人が居ました…。

女3 私も誰か、こつちから出てきましたけど…。

女7 あ、やっぱり？

女3 知らない人でしたけど、

女7 これ、こつちとかこつちとかから出ると、逆から出てくるんですよ。

女3 え？

女7 てことは、やっぱこつちかな…。

女7、下手奥へ去る。

と、上手奥から女1、上手前から女5出てくる。

一様に驚く三人。どうもどうもお辞儀をして、拍手をして、

女1 いやあ、良かったですね、

女5 良かった…。

女1 これだんだんと増えていく奴ですね！

女5 ですね！

女3 …。

女1 ああ、本当だ、ちょっと向きが変わってるんだ…。

女5 え？

女1 あ、いや、こつちの人が、向きがどうのこうのって言うたので、何言ってるんだろっ

て思ってたんですよ。これは確かに混乱させる奴だわ…。

女5 向き？

女1 ええ、あの、こつちにも同じ劇場があるんですよ。

女5 知ってます。

女1 ああ。そこで私、こつちから入ったんです。

女5 ええ、まあ、それ、私も、こつちで聴きましたけど、同じ話。

女1 ああ…、え？

女5 なんか、向きが変わってるって…。

女1 そうなんです。今までずっと、同じ向きだったんですけど、ここだけ…、

女5 あ、の、さっきの人もそうやって言っていましたけど…そんな事ないと思いますよ？
女1 いやいや、そんな事ありますよ、だって、

女1、上手奥へ。

女2、下手前から、

女2 わ！ああ、あ、どうも…、

女3・5 どうも…。

三人、お辞儀をして、拍手。

女2 (見まわし) あ、ああ…、なるほど、ああ…、

女2、下手奥の出入り口を覗き込むように見て、そこには行かず下手前に去る。

女1、戻って来て、

女1 あれでした、あの、向こうも、こうなっていました…。

女5 何が…？

女1 向き。

女5 でしょ。

女1 ええ。で、なんか、誰か、居ました…、二人も。

女5 え？

女1 あっちにも二人居ますよ？

女5 あ、どんな二人でした？

女1 あ、なんか、あれ、どんな感じだったかな、ちよっと突然だったんで、

女1、行こうとする。

女3 あ、いいです、行かなくて…。

女1 え？

女5 え？

女3 あのお…、

女1・5 はい。

女3 どちらか、ここ(下手奥)、行ってもらえないです？

女1 え、なんでです？

女3 いや、ちよっと、試しに…。

女1 なんの試しにんですか？

女3 いや、あの、さっき、あの、居た人がね、ここ、行ったんですよ。

女1 はい。

女3 そしたら…、こう、二人、出て来たんですよ。

女1 は？

女5 え？

女3 いや、わかんないですよ。たまたま、偶然かもしれないですけど…、

女1 え、ここ？

女3 はい。

女1 え、でも、私さっきはここ、行きましたよ。

女5 私も…。

女3 うんでも、あなた向き変わってたんですよ？

女1 うん…。

女3 そっち戻っても、向き変わってないですよ？

女1 …。

女1、上手奥へ。

女2、下手前から、

女2 すいません…。

女3・5 いえ…。

女2、去る。

女1、戻ってくる。

女1 変わってないです…。

女3 でしょ。

女5 え、だから…？

女3 だから…、ちよつと行つて貰えませんか？

女5 嫌ですよ、え、怖い…。

女1 え、え、どういう事ですか？

女3 だから…、分裂する？

女1 え、誰が？！

女5 え…？！

女3 いや、例えばの話ですから。

女1 例えばって、だって私は、ここから、こう来たんですよ…？

女3 でも戻れないんですよね、さっきの部屋…？

女1 …。

女3 変だと思いませんか？さっき居た場所に戻れないなんて。

女1 え…？

女3 …。

女5 あなた、どこから…？

女1 いや、ちよつと待つて下さい、え…？なんで距離置くんですか？

女5 だって…、

女3 あ、そうだ。ちよつとじゃんけんしませんか？

女1 ヤですよ！

女5 え、なんで！

女3 いや、一回だけ、

女1 ヤダヤダ、

女3 あの、ちよつと待つて、興奮しないで、

女5 いや、ちよつと、放してください。

女3 あの、冷静に、冷静にね、

女1 いやいやいや、

女三人、そのまま、上手奥へ。

女2、女4、女6が同じ態勢のまま下手前から出て来て、

女4 あの、ちよつと待つて…、

女2 いやいやいや、

女6 放してください…。

女4 だって放したら逃げちゃうでしょ？

女6 逃げないです。逃げられないですから。

女4 あの、一旦、落ち着きましょうよ。

女2 あ、誰も居ない…。

女4 あの、大丈夫ですから、だって、人が増えるとか、あり得ないじゃないですか。いや、あり得ますけど、あの、一人の人が分裂してとか、そんな、演劇じゃないんでつまんない。

いや、演劇ですけど、いや別につまんなくはないんですけど、

女6 何言ってるんですかさつきから…？

女4 とにかく、そういう怖い奴じゃないですから恐がらないで。

女2 え、なんでそんな事言えるんですか？

女4 だって私ここ行きましたから、

女6 私だって行きましたよ。

女2 私だって。

女4 うんだからいいじゃないですかもう一回行つても。

女6 うんだからそれは、なんで？

女4 増えるかもしれないから…。

間。

女2・6 ヤダヤダヤダ！（逃げる）

女4 あ…、（靴が脱げて出遅れる）

女2と女6、下手前に逃げる。

と、女1と女5が上手奥から出て来て女4をがしっと掴む。

女1 あ、どうも（お辞儀をして手を叩く）。あの、隣の人、ちよつと変な人かもしれないですよ。凄い怖い事言います。

女4 あ、そうなんですか、じゃあちよつとここでじつとしててください。

女1 あ、はい。

女4、下手前に去ると、女3が上手奥からやってくる。

女3 逃げないでくださいよ！

女1・5 わ。

女3 大丈夫だから、ね、増えても、消えないですから、元のオリジナルは。

女1 ヤダ怖い、オリジナルとか何？！

女5 怖い！

女3 だって消えてないじゃないですかあなた。

女1 私はもうそういうのは、そういう超常現象的な奴は一切信じない人間なんで、ユーフォ

ーとかユーマとか、エリア51とか、一切、

女3 結構詳しいじゃないですか。

女5 もう怖い！

女3 ちよつと待って。

女5 はい！

女3 だから、さっきのは偶然だったのかを確かめただけなんですよ私。

女1 じゃあ自分で行ったらいいじゃないですか。

女3 私が行ったら確認出来ないじゃないですか。

女1 あ、じゃあ私が確認しますよ。

女5 私も確認しますよ。

女3 じゃあ私も確認しますよ。

女1・5 どうぞどうぞ。

女3 ありがとう。

女1・5 とはならないですよ？！

女3 聞いて下さい。いいですか…、私もさっき、ここから出て、こつちから出て来たんです。

女1 え？

女3 あなたと一緒にです…。

女1 え？

女3 私も、消えてないですから…、

女5 え？

女3 大丈夫ですよ、たぶん…。

女5 え、お二人って…、

女1 あ、また距離置く…。

女3 いや、あの、だからそれをね…、

女5 だってここ、まっすぐ行ったら、まっすぐ出て来るんです。

女3 そんな事言われても、出てこなかったんですもん…。

女1 うん…。

女5 …（後ずさる）。

女3 ちよつとちよつと、

女5が逃げるので、それに連なってまた上手奥へ、

また別の三人が同様に。

女4 ちよちよちよ、だから、まっすぐ行ったらまっすぐ出てくると思うんだったら、どうです？行って見たら。

女6 嫌ですよ！もしそれでこつちから出てきたら、私も変な人達の仲間入りじゃないですか。

女4 変な人達ってなんですか…。

女6 だって、

女2 じゃあじゃあ、三人で行ってみます？

女4 出た、そういうの、なんて言うんですか、その日本的な、皆で行けば恐くない、みたいな、

女2 だって誰も行きたくないんだっつらしようがないじゃないですか。誰も行かないか、皆で行くか。

女4 それだと先に進まないじゃないですか。

女2 先ってなんですか？

女4 だから…、

女2 どこに行っても…、

女4 でもどこに行っても同じじゃないかもしれないから、その、つまり出口があるかもしれないから、それを探ろうっていう話をしている時に…

この時に、女6は手奥からこっそり逃げていて、

女7が下手前から出てくる。

女4 あの子逃げましたよね？

女2 逃げましたね…。

女7 …。

女4 戻ってもらっていいですか？

女7 はい…。

女7戻り、女6が出てくる。

女6 すいませんでした…。

女4 あのですね…、私だって、誰かが分裂するところを見たい訳じゃないんですよ。いやち

よつと見たいですけど…。そういうのじゃなくて、偶然なのかわからないけど、人が増えるんだっつら、私が探してる人もその中に居るんじゃないかと思って言ってるんです。

女2・6 え…？

女4 もしかしたらあの子も、探してるかもしれないし…、わかんないけど。

女6 そう、ですよ、探してるかも、しれないですもんね…。

女4 ええ…。

女6 じゃあ私、行きますよ。

女4 え？

女2 え？

女6 だって、さっき行ってもなんともならなかったし…。

女2 じゃあ私が行きますよ。どうせ、変な感じになったんだし…。

女4 じゃあ私も…、

女6 いやそういうのじゃないんで…。本当に。

女2・4 …。

女6 一人の人が、分けれるとか、そんなのある訳ないですよ…。

女2 ですね…。

女6 じゃーんけん、

女6と女2、じゃんけんをして、女6が勝った。

女6 そことそこ、ちゃんと見ててください。

女2 負けた方が行くんじゃないんだ…。

女6 ええまあ。じゃあ…。

女4 よろしくお願いします…！

女2 頑張ってください！

女6 (急に怖くなるが) いや、行くだけですから…。

女6、身体を両腕で抱えながら下手奥へ。

女2と女4、振り返り上手の二箇所を凝視。

と、上手奥から女5、上手前から女7が、身体を両腕で抱えながら同時に出て来た。

女2・4 …。

下手前に逃げていく二人。

上手奥から女1と女3が出て来て、

女1・女3 わ!

女5・女7 わ!

女1・女3 あ、どうも。

女5・女7 どうも。

皆、お辞儀、拍手。

女1 あのですね、今、隣で、とても恐い事が起きましたよ。それをここで口にする事は出来

ませんが、それはそれは気持ちの悪い事でした。あの二人には、いや一人には、私もう二度と会いたくありません。あんな事が起こるくらいでしたら私はもう演劇辞めたいです。

女7 向こうでもそう言うてんだらうな…。

女1 皆さーん、ここはもう行かない方がいいです。もう封印です此処は。他にもどなたかに会ったら言うておいてくださいキモいから。

女3 いやあなたもじゃないですか…。

女1 …。

女3 あなただってこっちから出てきたじゃないですか…。

女1 出て来てないです…。

女3 なんて嘘つくんですか。

女1 嘘ついたっていいじゃないですか…。

女3 あれはもう偶然じゃないですよ…。

女1 偶然じゃないですよ?

女3 どうするんですか?

女1 あなただってそうなんですよね。

女3 そうなんです。

女1 どうするんですか?

女3 もう分かりません。

女1 私もです。

女7 え、え?

女5 同時に、出て来たんですか?私も、ここに来る前、そういう話してて…、

女7 え?

女1・3 え?

女5 逃げないで、聞いて下さいね…、私も、こう行って、こっちから出てきたんです…。向き、変わってますね…。

女1・3 …。

女1 え、じゃ、じゃあ、

女3 お二人も…?もともと…、

女1 き(もい…)。

女7 いや私は関係ないですよ。

女5、上手奥へ、

女6、下手前から、

女6 …。

女6、戻る。

女5、戻ってくる。

女5 戻れない…(顔を両手で多い、しゃがみ込む)。

女1と女3も同様にしゃがみ込む。

女7 ちょっと皆さん、やめましようよ…、

女1・3・5 あー私はどこから…、

女7 あ、じゃあ二人同時に戻ってみませんか？そしたら一人になるか、やってみませんか？

女1 あなたよくそんなおつそろしい事言えますねえ！あれですか、DMですか！

女3 それでもし本当に一人になったらどうしてくれるんですかあ？！

女7 だってあり得ないですからそんなの、

女3 いやいやいや、

女3、上手奥へ、

女4、下手前から、

女4 いやいやいや、

女7 はいはいはい。

女7、女4を押し戻す。

女3、戻ってくる。

女3 いやいやいや、あなたそんな冷静にあなた…、

女7 だってわからないじゃないですか、そんなわからない事に不安になっても、

女3 私達は見たんです、一人がここから入って、二人がここから出てくるのを。

女1 そうです！

女7 ええ、でも、そう言われて、確認してくださいって、言われて、でも、私としては、なんにも、ただ普通に、歩いて来ただけなんです。なんにも、違和感は無くてですね、その、

女5 (立ち上がり)わかりました。いいですよ。じゃあ、やってみましようよ。

女1・3 え、え、え

女5 その代わり、行ったら、すぐに戻って来ませんか？

女7 いいですよ…。

女5 で、どうなったのか、お互いに、確認…。

女7 はい…。

女5、女7に握手をして、

女5 一緒になってたら、すみません…。

女7 え、なんで…？

女5 背中とか、毛深いんで…。

女7 は？

女5 あんま見ないください。

女7 いや、そんな、大丈夫ですよ、私だってそんな…、

女5 なんですか？

女7 いや別に言わなくていいですそんな事。

女5 ああ、じゃあ、同時に…。

女7 はい…。

女1 え、行きます、本当に？

女5 お願いします。

女7 せーの、って言ったらいきましようね。

女5、せーので行ってしまう。

女6、出て来て、

女3 あ、これ一人で行くと、こっちから出てくるんです。

女1 知ってます。

女7 ごめんなさい、あの、何度もすみません…、
女6 え？

女7、女6を押し戻す。

女6 え？

女5、戻って、

女5 え、え？

女7 あ、まだなんにもなってないです…。

女5 え？

女7 ちよつと出遅れちゃって、

女5 え？

女7 もう一回、

女5 えー、なんだあ…！まだ…？

女7 ごめんなさい、じゃあいちにのさんはい、の、はい、で、

女5 はい…。

女7 じゃあ行きますね、

女5 すぐに、戻って来て下さいよ。

女7 (うなづき) いち、にの、さん、

女5・7 はい！

二人、同時に入った。

女6が下手奥から。

女6 …。

女1・3 …！！！！

女6、すぐに戻った。

女5と女7、戻って来て、

女5 ど、どうでした？

女1 (上を向き) 私、今、涙が…、

女3 分かります。分かりますわ。

女1 私達は、一体何者なのでしょう。

女3 どこから来て、どこへ行くのか…、

女1 無限に増殖を繰り返す細胞でしょうか…。

女3 細胞の一つ一つが集まって出来たのが私なのだから、なんら不思議な事でもないでしよ

う。

女5 どうだったんですか？

女1 一人になってました…。

女3 お二人は今、一人でした…。

女5 …。

女5、大声をあげて泣きだすので、女1と女2も泣きだし、

女7 あのね、

泣きながら、上手奥へ行くと、

女2と女4と女6が下手前から出て来てしまうので、

女7の顔を見て、「わー！」とびっくりして、そのまま逃げるように上手奥へ。

と下手前から女1と女3と女5が出て来て、また「わー！」と言って同様に。

また三人出て来て、また「わー！」と驚いて同様に。

女7 …なんだこれは…。

また三人出て来て「わー！」となるが、女7下手前の扉を抑えて、

女1 あ、行けない、

女3 あ、あ、

女5 あ、

女7 何やってるんですか…。

女1 だって…、

女7 あなたも一緒になって…。

女5 だって…、

女7 それでどっちだったんですか？私と彼女、一体どっちが出てきました？

三人 え…？

女7 二人で一人なんですよね？

女3 あ、いや、どんな子だったかな…。

女7 私、出た先に居たのは、お二人じゃなかったですよ。

女3 え？

女5 私も…。

女1 え、てことは、どういう事？

女7 増えたり、一緒になったりはしてないと思いますよ。

女3 え、でもお二人が一緒になると、さっきみたいな子になるんじゃないんですか？

女7 は？

女3 え？

女7 合成写真みたいなの？

女3 そうそう。

女7 そんなに似てました？

女3 いえ全く…。

女7、あっさり下手奥へ。

三人、驚く。

上手奥から女2、上手前から女4が出てくる。

女2・4 あ、どうも。

他 どうも。

お辞儀と拍手。

女4 えっと、こちらでもだいたい同じ話になってますよね…？

女3 まあ、はい…。

女4 向き、違うんですよね？

女2 違います…。

女2、向きが違う組に並ぶ。

女2 わ、ホントに違いますね！

他 でしょでしょ！

女4 これ、分裂してる訳じゃないと思いますよ。だってさっきの人たちと違いますもん。

他 …。

女4 おそらく、別々の場所で、別の人達がおんなじ話をしてるから、同じタイミングで出てきちゃうだけじゃないですか？だから、私がこっち行っても出てくるのは別人なんです。じゃあ、短い時間でしたけどさようなら。

女4、下手奥へ。

上手奥から女6、上手前から女7。

女7 ですよ…？

他 …。

女7 あ、どうも。

他 どうも。

女6、向きが違う組に並ぶ。

女7 しかしこれだけ増えても、私の探してる人にはまだ会えないんですよ…。

女3 いや、あのですね…、ここ行くとこう増えるって言うのはまあいいですよ、そういう偶然があっても。でも同時にこっちから出て来た人が、元の場所に戻れないって事が不思議なんですよ。

他 そうだ。

女2 私達はどこから来たんですか？

他 そうだそうだ！

女1 その質問には全く答えてないじゃないかあんた。

他 そうだ！

女7 いや、そんなの私は分かりませんよ…。

女5 無責任じゃないか！

他 そうだぞ！

女7 だって私はそこから出ると、必ずこっちから出てくるんですもん。

女3 私はこっちから出て来たって言うてるだろうがバカ。

女7 あ、ちよつと、そういう発言は品位を疑われますよ。

女6 何が品位だこの野郎。

女1 品位なんか初めから無いぞ！

他 そうだそうだ。

女7 いや、皆さんの発言を信用したら、それは不思議な事が起こっているとは思いますよ。

女3 あ、じゃあなんですか？我々が嘘をついてると、そう言うんですかあなたは？

女1 おいおいー。

女2 なんだその言い草は！

女5 撤回しなさいよ！

女1 おいー。

女7 だってそんなのあり得ないじゃないですか…、こっちから入るとこっちから出てくるんですよ…？

女3 あ、逃げる気ですか？

女7 いやいやそうじゃなくて、私だって皆さんの気持ちは分かりたいと思ってるんですけどね、

女2 ホントに分かりたいと思ってますか？

女7 思ってますよそりゃあ…、

女1 おいちよつとバカにしてんだろ？

女7 いやしてないですよ。

女3 何笑ってんだおい！

女1 笑った、この人笑いましたよー。

女7 いや、すいません。ちよつと通して下さい。

女7、下手奥へ。

女6 こんなダメですよ。

女1 前代未聞ですよー！

他 そうだそうだ。

女5 説明してください。

女2 国民に対して誠実に答えてください。

他 そうだ！

上手奥から女7、上手前から女4が出てくる。

女4 あ、どうも。

他 どうもー！

女4 うん、やっぱり私、こっちから出て来るんですよ。

女7 …。

女4 (女7に) あ、向き、変わってる側の人ですか…？

女7、列に加わる。

女4 え、本当ですか？皆さん私を騙そうと口裏合わせてませんか？

女3 なんて言うんだあなたは！

女7 そうですよ、あなたを騙して私達にどういうメリットがあるんですか？

他 そうだそうだ！

女1 芸能人気どりかあんた！

女2 ちよつと美人だと思つてえ！

女3 美すぎるだろうこの野郎！

女5 育ちが良さそうだなお前！

女7 こつちの身にもなれつてんだバカ。

他 そうだ！

女1 どういう肌のケアしてんだこの野郎。

女4 だんだん言ってる事が…。

女7 なんだなんだあ？

他 なんだあ！

女4 いえ(ちよつと笑つてしまう)…。

女2 あ、笑つた。

女1 おいおい！

女3 ちゃんと質問に答えてください。戻れない理由、説明してくださいますか？

女4 ですから、私は分からないですよ、なつた事ないから…。

女7 自分は体験した事ないから分からないというのは、とても無責任な発言だと思いますが、

どうお考えですか？

女1 これは事件なんだという自覚が足りないんじゃないですかあなた？

他 そうだ！

女4 じゃあ、もうそういうモノなんじゃないですか？

女1 はあ…？

他 はあ？

女4 そういう、その…、

女7 何を言つとるんだ君は！

女2 キレてるんですかあ？

女4 キレてないです…。

女3 全然似てないぞー！

女4 モノマネしてないですもん。

女7 やつてみるモノマネ！長州の。

女4 いやちよつとそれ…

女1 あ、手出さないでください。

女7 手出すのダメだぞ。

女4 ほら、スタッフ細胞だつてそうじゃないですか？こうやるとこうなるつていう、現象が起るだけでその理由までは分からないし、探ろうとしないじゃないですか。理由を解明する事に時間を掛けるよりも、この現象を利用する方に頭を使った方が、建設的だと思うんですけど。

皆 …。

女4 じゃないです？

女3 何を言ってるのかさっぱりわかりませんね…。

女2 何が今更スタッフ細胞だバカもの。

他 何言つてんだ。

女2 何言つてんだ。

女7 無いぞ、スタッフ細胞なんて。

女1 問題をすり替えないでください。

女4 うん…、スタッフ細胞を例に出したのは謝ります。

女7 ストレス掛けないでください。

他 そうだそうだ！

女4 あつちに行つて、人が増えるなら、増やしてみた方がいいと思うんですよ。その方が、探してる人に会える可能性が高まるじゃないですか。

他、どよめく。

女7 あなたはまだ我々のような犠牲者を増やそうとするのですか？

他 あー…。

女5 庶民の気持ちを全く理解していませんね。

女6 独裁者ですよあなたは。

女4 なんかく良く分かりませんが、え、皆さんはどうしたいんですか？

他 …。

女4 私は、探したいんで、だから、行きますね。

女4、行こうとすると、

女7 なんでそんな自分ばかりカッコよく…。

女4 いや、別にそんなつもりは…、

皆、女4を恨めしく見つめる。

女4 じゃあ…、皆で行きます？

女2 出た、その皆で行けば恐くないみたいなさういう、

女4 一人でも行きますけど！

皆、女4の背中を掴んで、お化け屋敷にでも入るような足取りで、

女4 押さないで下さい…。ちよっと、

下手奥へ。

音楽。

上手奥から出て来て、女6の背中に皆、掴んで出てくる。

女5が居ない。

女6 ちよっと、押さないで…、

女2 だってあなたに付いて行けば分裂しないで済むんですよ？

女6 だから、分裂してる訳じゃないですから…、

女1 じゃあどうして増えるんですか？

女6 だから…、

そのまま下手前に去る。

上手前から、女3を先頭に出て来て、

女6が居ない。

女3 増えるって事はですね、どこか別の通路があるはずなんですよ。

女4 ずっと同じところぐるぐるしてるみたいですよ。

女3 線路の切り替えみたいに、部屋が回転するとか、

女2 部屋自体が回転したら、私達に自覚はないですよ確実に。

女3 そうそう。

女7 あの、誰も居ないんですけど？

女4 え？

女7 さっきから…。

下手奥に去る。

下手前から女2を先頭にやって来て、女7が居ない。

女2 確かに、誰にも会わなくなりましたね…。

女1 もう…他に居ないんですかね。

女4 他に居なかつたら、私は誰を探してるのか分からないんですけど…。

女3 どんな人なんですか？

女4 分からないです、会った事ないんで。

女2 え？

女4 もともと、居ない人ですし、

上手奥に去る。

上手前から女1を先頭に。女4が居ない。

女1 もともと居ない人ならもう探しようが…、

女2 ですよね。

女3 探しようは、あるんじゃないですか？初めから居ない人なら。

女1 え？

女2 どうやって？

女3 だって、誰だって一緒じゃないですか？

女1 え？

女2 え？

下手奥に去る。

下手前から、女1と女2がやってくる。

女1 まあ確かに、会ったとしても、会った事ないんじゃない、ねえ…。

女2 まあ…。

女2、立ち止まる。

女1 ？

女2 私達って…二人でした？

女1 え…？

女2 もっとたくさんの人と話してたような…。

女1 居ました？

女2 …。

女1、歩き出す。

女1 何してるの？

女2 …。

女1 …。

女2 何も？

女1 行こう。

女2 うん。

二人、上手奥へ去る。

下手前から、女3、上手奥へ。

同様に、女4、女5、女6、女7と通り過ぎていき、最後に無人の舞台があつて、照明だけが人が来た時のようにぼんやりと点いて、やがて消える。

女1が上手奥からやってくる。

女1 女が一人やってくる。この位置に立つと、

溶暗。

〜終〜

【上演記録】二〇一七年六月二日～四日 オイスターズプロデュース公演／損保ジャパン人形劇場ひまわりホール

十月二十三日～二十四日 まつもと演劇祭／まつもと市民劇場

【スタッフ】演出／平塚直隆 舞台監督／柴田頼克 照明／今津知也 音響／椎名KAN S

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。

上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所屬する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp